

イースターメッセージ

壁は崩され、蓋は砕かれるのだから

吉高 叶

(日本バプテスト連盟市川八幡キリスト教会牧師、
NCC日本キリスト教協議会議長)

ささやかながらも、心から平和を祈りながら歩んでいる私たちの前に「壁」が立ちはだかることがあります。小さいながらも、いのちの叫びに耳を傾け、その声に応じて交わりをつくっていかうとしている私たちの上に「蓋」がのしかかる時があります。心が折れそうになり、気づいたらため息ばかりをついている時があります。私は、今まさに、そのような気持ちに沈んでいます。世界的大国が他国の体制転換を謀り、実際にミサイル攻撃によってその国の主だった人々を殺戮してしまいました。無差別に放たれたそれらのミサイルは、女学校にも襲いかかり、たくさん子どもたちが犠牲となりました。つくりものの映画などではない、こんな残虐で非人間的なことが、いま、ほんとうに起こっています。しかも、もう何年もの間、私たちはこうした悪魔的な現実に向き合わさせられ、「なぜ終わらせられないのだろう、なぜ止められないのだろう」「いったいこの世界はどうなってしまうのだろう」と、半ば絶望的な気持ちになってしまうのです。

キリスト教会の暦では、いま「受難節」を過ごしています。神の想いを身に受けたイエスという人が、嫌われ、捨てられ、殺されていく道の見つめながら、いま、このときもイエスはこの世界で殺されていくのだなあ、と感じるのです。けれど、もう一つの声、「人間の謀(はか)らいの力や、暴力で相手を支配する力は、最終場面とはならないのだよ」というイースターのささやきに、「ほんとうにそれを信じたいです」とずがるような思いで、私は今年の受難節を過ごしています。

人々を縛り付けていた剣や槍の暴力、宗教観念や制度、律法主義の支配(「罪人」のレッテルを貼られる恐怖)の縛りから人々を解き放とうと、宗教的な境界線を飛び越えて、出会った人の尊厳の回復を宣言して歩んだイエスでしたが、結局は十字架にかけられ殺されてしまいました。そ

の「結局」をもって、イエスに従ってきた人々の歩みの物語は終止符を打つと思われました。でも、そうなりません。むしろそこから「主イエスはよみがえられた」「あの方が示した『いのちの道』は決して終わらないのだ」という信仰が生まれていきました。復活のイエスと出会った人々と、その証言を自分の中に重ねて経験した人々が、通来の「結局」の局面を、新たな出発の場面に転換させて踏み出していくことから、新しい人たちの新しい生き方が始まっていったのでした。イースターはそのような事件です。

主イエスの生涯を伝えるどの「福音書」も、イエス復活の場面について証言していることがあります。「イエスの遺体を納めていた墓の蓋(大きな石)は脇に転がされていて、中にはもうイエスの姿はなかった」ということです。墓はイエスを閉じ込めておく場所ではなかったというのです。イエスという人は、神の祝福を一人ひとりに注ぐ人でした。互いの尊厳を保ち合う交わりに招く人でした。痛みと悲しみに寄り添い共感を通して癒す人でした。「神の国は、低められ侮られているこの人のものだ」と宣言する人でした。そんなイエスの信実・イエスのいのちそのものを、墓の中に閉じ込めておくことはできなかったのです。

冒頭に書きましたが、いま私たちの世界・私たちの交わりに、あまりにも頑強な壁が立ちはだかり、重く巨大な蓋がのしかかっている、人間の歴史、人間の真実、人間の理性、人間の希望を閉ざし、人間を絶望させてしまうような力が猛威を振っています。しかし、私たちにのしかかる岩、交わりを引き裂こうとする壁、希望を塞ごうとする蓋、それらがどれほど大きく強く重くても、必ず砕かれ転がされる。「それを信じて勇気をもって生きよ」と言うのです。闇にいのちを閉じ込めようとしても穴は開き、真実に蓋をしようとしてもきっと脇に転がされる。いのちには、蓋はできない！ 暗闇の洞穴に光の入り口が開く！ それが、復活(イースター)が私たちに呼びかけてくれていることです。暗闇を懸命に生きようとする人々に、神が届けてくれている呼び声です。

だから、落ち込みながらも、喘ぎながらも、それでも諦めずに「平和を祈りながら生きよう」と、「暴虐に苦しむ人々の求めを、みんなの求めにしよう」と、そして「人間の尊厳を認め合う交わりづくりに取り組もう」と、顔を上げて、明日も歩み続けたいのです。